東風の呼びかけ

窓ガラスをふいに叩く風に
陽光のさざめきが近づくのを感じ
胸騒ぐのを覚える

いつのときからか窓外に注ぐ視線は息絶え
まどろみのうちにこの部屋を見回す僕は
積み上げた生活の小道具類に嘆息を洩らす

このガラスに隔てられた僕と風は
それぞれのもの思いに互いを探り合うことを忘れ
去り行こうとする者の後ろ姿を見送ることもない

ひとときもとどまることを知らぬ心の揺らぎは今や煩わしく
この部屋を満たす安らぎを焦燥へと導き
目の前のヴェランダから身を躍らせよと駆り立てる

窓ガラスに背を向けてもたれかかっても
風はその背中をなおも叩き、放浪へと押し出そうとする
繰り返し、繰り返し・・・

通俗な幸福に陽光への憧れを重ねたこの僕に
今から何をお前は求めよというのだろう
そのために棄て去るものの大きさを測ることなどできようか———

何度でも通り過ぎてゆくがいい、季節よ
そしてこの僕を忘れ去るがいい
どうか、この僕を・・・

(1992.2.18)